

## ちょっと気になる 健康の話

# 水いぼととびひについて



### 【水いぼ】

#### 原因

伝染性軟属腫(でんせんせいなんぞくしゅ)ウイルスが皮膚の小さな傷や毛穴から入り込み、皮膚の細胞に感染・増殖していぼになります。主に接触によって直接感染しますが、タオルなどを共用することによって間接的に感染することもあります。

#### 症状

1～5ミリ大の肌色からすこし赤みを帯びた丸いツヤツヤした柔らかいいぼで、大きいものでは中心にわずかな凹みができます。中には白いチーズ状のかたまりが入っています。この中に、ウイルスがたくさん含まれており、付着することで感染が広がります。全身に発症しますが胸やおなか、わきの下などのする場所に多くみられます。ほとんどの場合自覚症状はありません。アトピー性皮膚炎のお子さんでは、かいて広がっていくことがあります。

#### 治療

日本小児科学会は水いぼの治療は不要としています。6か月から数年ほどでウイルスに対する免疫がついて自然に治癒します。しかし、病変が広がったり、他の子にうつしたりすることを防止するために、痛み止めのテープを使ってからピンセットで取ったり、液体窒素で除去するなど積極的に治療することもあります。取ったあとに新しい病変が出現することも少なくありません。ヨクイニンという漢方薬には治癒を早める効果があると言われています。

#### 予防

登園や登校の制限はありません。ジクジクしたところには衣類・包帯・ばんそうこうで覆い、他の子どもへの感染を防ぎましょう。

プールの水では感染しないのでプールを禁止する必要はありません。しかし、タオルや水着・浮き輪・ビート板などを共用しないようにしましょう。また、プールのあとにはシャワーで肌を清潔にするように指導しましょう。

皮膚の保湿や手洗いの励行などの一般的な予防をこころがけることも大切です。



監修／長崎県小児科医会

### 【とびひ】

#### 原因

伝染性膿痂疹(でんせんせいのうかしん)とよばれる病気で、虫さされやあせもをかきむしったり、傷口から細菌が感染することで発症します。アトピー性皮膚炎があると皮膚のバリア機能が低下するため、「とびひ」になりやすい傾向があります。

#### 症状

とびひは大きく分けると「水疱性膿痂疹(すいほうせいのうかしん)」と「痂皮性膿痂疹(かひせいのうかしん)」に分けられ、それぞれ感染の原因となる細菌と症状が異なります。

#### ●水疱性膿痂疹(すいほうせいのうかしん)

黄色ブドウ球菌が皮膚に感染することにより発症します。6歳くらいまでの乳幼児に多く、夏によくみられます。かゆみが強く水ぶくれができ、水ぶくれが破れて皮膚の表面がただれてしまいます。

かゆみのためにかきむしった手で全身を触ることで広がる場合があります。

#### ●痂皮性膿痂疹(かひせいのうかしん)

溶血性連鎖球菌が皮膚に感染することにより、年齢や季節に関係なく発症します。炎症を起こして赤く腫れ、厚いかさぶたができます。感染することで発熱やリンパ節の腫れなどがみられる場合もあります。

#### 治療

抗生剤の飲み薬や塗り薬が処方されます。水ぶくれが大きい場合は、かきむしって潰さないように中の液を排出することもあります。かゆみがひどい場合は抗ヒスタミン剤の飲み薬が処方されることがあります。

登校や登園に制限はありませんが、病変部を覆って他の子どもにうつさないようにしましょう。またタオルなどを共用しないようにしましょう。

プールの水で感染することはありませんが、プールに入ると、かきむしって悪化することがあり、接触によって他の子にうつすことがあるのでプールや水泳は控えましょう。

#### 予防

こまめに手洗いをし、お風呂やシャワーで全身の肌を清潔に保ちましょう。

鼻の入り口にはとびひの原因菌がたくさんいるため、鼻を触らないように指導しましょう。

虫さされやケガはきちんと治療して、かきむしらないようにしましょう。